島

小島信夫

講談社

島

昭和31年2月10日　第1刷発行　〒280

著者　小島信夫（こじまのぶお）

東京都文京区音羽町 3—19
発行者　野間省一

東京都文京区音羽町 3—19
印刷所　豊国印刷株式会社
代表者　渋谷龍吉

発行所　東京都文京区音羽町3—19　株式会社　大日本雄弁会講談社

落丁本・乱丁本はお取りかえいたします。　（黒博製本）

目

次

第一章　魚をのせて来なかつた船……七
第二章　不埒な漁夫の失踪……二五
第三章　見えない闖入者……四一
第四章　眠りたがる男……六一
第五章　詰所に残された記録（一）
　　島が見えなくなると……七五
第六章　詰所に残された記録（二）
　　肩馬事件……八三
第七章　遂にやつて来た待人……一〇九
第八章　昆虫論……一二九
第九章　使節の上陸、先ず噂男との対面……一四七
第十章　人質の詐術……一六七

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.

第十一章　異変。救済の開始……一九八
第十二章　要領を得ない会話
　島長の歎き……二〇二
第十三章　骨の折れる行進
　外国訪問談……二二五
第十四章　広場の孤独
　確認者の越権……二二九
第十五章　煙は出なくなつた……二三二

装幀　牛島憲之

島

第一章　魚をのせて来なかつた船

あるうららかな秋の日の夕刻に、数日前にこの村を出た漁船の一艘がもどつてきた。私の家は村の南側にあるが、西側にある少しつき出た丘にのぼると、遙か北の海から帰る私たちの漁船の姿が見えるわけである。漁から帰る時には、船の中からいつも歌声が聞える。そうした歌声はこの村のいくつかの歌の中の一つだが、彼らの沖の潮風できたえた声は、百姓たちが野良で、収穫が近づくと十日に一度ぐらいドナるように歌う声と共に、とにかくこの村の祭になくてはならないものなのだ。祭は収穫を待つて行われたが、百姓らの歌は漁夫の哀調を帯びた強い音声には敵わないようであつた。祭の日にはこの歌声を慕つて、村の者は子供だけでなく、漁師というものをアコガれたが、しかし今では漁師の伜といえども、先ず漁師になりたがる者もないと云つてよかつた。つまり漁師は百姓よりも割がわるかつた。何しろこの近海には魚の収穫は少なく、遠方に行く習慣はふしぎと、この村にはなかつた。先祖が行かなかつたというだけのことかも知れない。もつとも一、二度、未知の海へ開拓に出かけたという話だが、その半分ほどは半殺しになつてもどつてきたことはある。噂によると、遠方の海は、彼らの海ではないようなのだ。それは誰

が決めたことか、彼らは知るわけもないし、未だにその噂の中に疑問が残つている。
（誰の海だろうか。島ならばともかくあの広い海が、なぜ、自分たちのものではなくて、誰かの専有でなければならぬのだろうか。そういうことがどうして出来るのだろう……）
もつとも彼らが殺されたり半殺しになる時に、
「お前たちはここへ来るケンリはない」
と云う言葉を聞いたということも云われている。この村の者が「ケンリ」という言葉を使うようになつたのも、その災難がもとだともいう。たぶんそうなのであろう。何しろこの村では「ケンリ」なる言葉は相手をなぐつたり、蹴倒したりするさいに頻繁に使われ、喧嘩をする時は、この言葉が双方から応酬される。
「ケンリだ」
「このケンリめ、来るな、だまれ」
といつた調子である。勝つた時も、「それ、おれのケンリだ」と叫ぶ。私たちも大人に負けずよく用いた。それだけではなく、ここでは、
「ケンリ取り」
という遊戯がある。あとになつて知つたが、これは普通、「陣取り」と云われるものらしい。それから私はこの村の寺の後ろの藪の中の墓群の中に「ケンリ遭難者の墓」というものを、和尚に教えられた。それはもう苔が生えていたし、石の面が一様にすりへつて、よく分らないが、墓石の裏には、十ばかりの名前が並んでいることは分る。が、これが災難にあつた人人だという。漁師の子はよくここへお参りにやらされる。それをまた「ケンリ参り」と云う。

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.

それよりまだかすかにうすれた噂がある。それは、その事件のあつたあと、復讐に遠海に出かけて行つたという話である。遠海から彼らが追われた時には、やはり二艘の船で漁に出かけて行つたのだが、復讐戦を行うためには、とても二艘では足りない。乗組員を増すだけではなく武器がいるからだ。当時の村長は豪胆な人で、漁師に復讐戦に出かける命令を出して、その準備を整えさせた。この村に武器はない。少くとも人を殺す武器を知らないはずであつた。

忽然として、村長は武器を案出したのだつた。

その次第は私の父が書き続けてきた、「本島噂話集」の中にも、まことしやかにこう記録されている。私のこの書物の中でも特にこの箇所は、父が何度も読んでさかせてくれたので、今でも空で唱えることが出来る。但し、これは書物といつても、かなり大きな板紙の集積なのであつた。父はこの書物を自筆で認めたわけだが、誰にも見せなかつたし、事ある場合には、しつかりと身につけてはなさなかつた。噂でも何でも心に思つていることは、他人に話してしまうと、きれいに忘れてしまうことが多い。父は噂を、何年かかつたかよくおぼえていないが、その著書の中に吸収し尽してしまうと、村人といつしよに、父さえも忘れてしまつた。そうしてたぶん、村人はその噂話の種本が公開されるぐらいに思つて心を許したことになる。父も結果から云うと、自から気を許して、忘れるためにその中に文字にしてしまつたのだ。

村長、第××代英五郎氏ハ「ケンリ遭難」後ハ、「日夜、考エツヅケラレタ。自分ノ村ノ者ガ殺サレタリ、ヒドイ目ニアックリスルコトハ、ツライコトジャ、ト申サレタ。マタ、自分ノ家ノ者ガソウシタ目ニアウノト同ジョウニ腹ガ立ッテ、マルデ自分ガ殺サレタ、ト同ジダトモ申サレ

タ。イヤソウデハナイ、ソレ以上ダト申サレタ。村ノ者ハ村長ガ、誰彼カマワズ呼ビトメテ、「死ヌトイウコトハ、考エタコトガアルガ、殺ストイウコトハ考エタコトモナカッタガ、ソレハドウイウコトダネ」トシツッコク聞カレルノデ、答エルノニ苦シングソウデアル。マタ漁夫タチニ向ッテハ、「相手ハ、コウイウフウニ拳骨ヲ使ッテフリマワシテイルウチニ、当リドコロガ悪クテコチラノ者ガ死ンダノカ、ソレトモ相手ハ、コチラガ、ソレデ死ヌノヲメアテニシテ、フリマワシタノカ、ソレヲキカセロ」ト申サレタ。ソレデ漁夫ハ思案ノ後ニ、「ソレハタシカニ、コチラノ者ガ死ヌノヲメアテニシテグト思イマス」「ソウカ、シカトソウダナ。ソレカラ、モウ一ツ聞クガナ。拳骨ヲフリマワストカ、押ストカ、蹴ルトカノ外ニ、何カ刃物カ、ソレニ類似シタモノヲ使ッタカ。使ッタニチガイナイナ。何シロ、切口ヲ身体ニツケテ死ンデイタノダカラナ。シカトソウダナ。ワシモソウ思ッテイタ。ヤッパリ、ソウナノカ。ソレデイイノカナア。ソレデハ、ワレワレガ食ウタメニ魚ヲ殺スヨウニ、殺シタトイウコトダガ、ドウジャ。ソウシテミルト、ワレワレガ他人ヲ殺スコトヲ考エモシナカッタノハ、マコトニ愚カナコトカモ知レヌ。第一、殺サナクトモイズレ死ヌノダカラナ。

ドウジャロー、遠クニオル者ハ、オナジ人間デモ、ツマリハ人間デハナイノデハナイカ。人間デモ魚グライニ思ッテイイノデハナイカ。少シモ可哀想トハ思エヌカラナ。メグリ合ウノハ、船ノ上ノ僅カノ間デ、ヤガテノコトニ、ワレワレハソノ顔モ姿モ見ナクナルナラバ、魚モ同然ジャ。忘レルタメニ、全速力デ漕イデモドレバイイ。トコロガ、自分ノ村ノ者ノコトハ墓場ガアルダケデモ、忘レルコトハ出来ヌカラノウ。ドウジャ皆ノ衆！」

第××代、村長、英五郎氏ハ漁師タチニ説カレタ。漁師タチハタダウナズクバカシデ、聞イテ

イルウチニサッパリワカラナクナッテシマッタ。村長ハソレホド考エガ深クテ、ツイテ行ケナカッタノデアル。

「ツマリ一口ニ云エバ、イツモ目ノ前ニ見テイナイ者ハ、魚ヲ殺スヨウニ死ナセテモイイトイウコトダ。タダシ、ソウナルト、コチラモ殺サレルカモ知レナイゾ。サテ、ソノアトハ、ワシハユックリ考エル」

次ノ日ニ村長ノ邸ノ前ノ立札ニ次ノヨウナ文句ガ貼リ出シテアッタソウデアル。

「現在マデニ本島ニ於テ、如何ナル理由ニモセヨ、人殺シノアッタ話ヲ心得テオル者ハ、即刻申出テ、ソノ時ニ使用シタ刃物ヲ知ラセヨ。ソノ中ニテ最モ有効適切ナル刃物ヲ教エタル者ニハ、応分ノ褒美ヲ与エル」

トコロガ、幾日タッテモ申出ル者ガナカッタ。村長ハ遂ニ次ノヨウニ貼紙ノ内容ヲ訂正シタ。

「……人殺シヲ行ウタメニ、最モ有効適切ナル刃物ノ案ヲ出シタ者ニハ……」

ソレデモ誰一人トシテ申出ル者ガナカッタ。村長ハシビレヲ切ラセテ、自カラ武器ヲ案出サレタ。ソレハ竹槍ト申スモノデ、竹ノ尖端ヲタダブッタギッタモノデ、ソレハ村長ガ幼年ノ頃、竹ノ切株ノ上ニ倒レテ、瀕死ノ重傷ヲオビラレタ、ソノ経験ニ基ク、全ク独創的ナ発明品デアッタ。竹ナラバ、本島ハ恵マレテイル。シカモ携行ニハ軽クテ便利デ、思イ通リノ長サニスルコトモ出来ル。刃ガ鈍クナッタラバ、再ビ切レバヨイ。

部隊ノ要員ハ漁夫ヲ主トシタガ、コレハ今一ツノ重大ノ任務、即チ本来ノ目的デアル、魚ノ捕獲ヲ行ッテ帰ルタメト、ソレカラ、仇ヲ討ツモノハヤハリ漁夫デアルベキダ、トイウ見地ニ立タレタモノト察スル。船一艘ヲ造ッタ。見送リハ厳禁シテ、夜陰ニ乗ジテ、村長自カラ指揮シテ、

出発シタ。半年後ノコトデアル。

父はそこまで読んでくれると、急にそわそわしながら、先きの頁をめくり、読むのを止めてしまつた。この父の読んでくれた部分だけがバカに鮮明で、あとは、村のほとんど消えかかる霧のような知識を頼らねばならぬが、それを総合すると、少くともこの竹槍は使用することがなく、村へもどつてきた。

いや出発したというが、そこのところが既に怪しいと思う。いや、出発だけはしたのだ。

竹槍の使用の練習だけはしたらしい。その痕跡は現在もたしかに残つている。祭の日には、漁師たちが、竹槍踊りというものを、美声に合わせて行うのを見ても分るし、それに子供も竹の尖端こそとがらせないが、突きあいの如き遊びを行うからである。

竹槍の使用法を練習する時、漁師たちは、違う土地の者を殺すために、こうして自分たち同志で殺すまねをしなければならぬので、おどろいたらしい。敵という言葉を村長は古書の中から拾い出して、使用したのであろう。

「相手を敵と思え。いいか、ワシをその敵と思つて突いてくるのだ。いや、もしそう思えなければ、猪だと思つてもよい」

こんなぐあいに、叱咤しながら練習をつむうちに、何か有害なものが、ひそんでいることに気がついた。それは英五郎氏も漁師の場合も程度の差こそあれ、あつたに違いない。それはホンノ僅かで、気がつかないと云えるほどのものかも知れない。とはいつても、あるにはあつたのだ。思索的な第××代英五郎は新鮮におどろき、遠海に復讐に赴くよりは、一切を忘れるに如かず、

と思つたことが考えられる。

それから今一つ、出発まで一艘の船の建造期間などを含めると、半年の期間がかかるのは当然だが、その間に彼らは、船の出来るのを待ちながら、出漁に赴くのか、出征をするのか、そこのところが日日アイマイになつて来たのではないか。第一遠海になぞ、出かけて行くことは、そもそも異例のことで、異例のことをしなければ、こんなことにはならないのだから、むしろ恨むべきは、近海以上に出ようとした慾張り根性である。いや、この附近に相手の船が現われたなら、われわれとしても、この竹槍で相手を……といつたぐあいに、自から武器を所有し、実際に動かして、相手へ突き出す訓練をしているうちに、そんなカゲが、冬の薄日の隙間洩れぐらいには彼等の心の片隅を領して行つたことだろう。

海を直接仕事の場としていない村長には、海へ出て行くまでは相手の船がじつと海の上で動かないものという珍妙な錯覚があつたらしい。ただ遠いだけで、動かないものというようなふうに思つていたのだ。

あれやこれやの末に、遂にいつもの出漁地点まで行くと、彼は漁をさせてから、竹槍を全部海の中にすてさせた。

「敵はどこにもいなかつたのだ。いやいるとすれば遠海のまた彼方の島にいる。そこの島まで行くうちにはわれわれは自分の島を忘れてしまうかもしれない。何しろ、何の奇もない、小さい島だからな。それは大へんおそろしいことだ。わしはもうかなり、忘れかかつてきた。恋しいことは恋しいがのう、我が島は。それにとにかく我が島が見えなくなるということだけでも、おそろしいことなのだからな」

二、三人の者は竹槍を海に投入したり、舳を故郷に向けることに反対したにちがいない。息子を殺された親とか、親を殺された息子とかは。

実は彼らは、初めて遠海に出た時には、半殺しにあつたり、数人の者を敵の手にかかつて失つたりしたが、それよりも帰路が大へんだつた。もう少しいいだろう、もう少しいいだろうというあんばいに沖へ沖へと出て行つたのだが、彼らの目じるしは彼らの島ぐらいの遠さのところにある無人島なのだが、あるところまでくると急に消えたようになくなつてしまい、気がつくと既に潮に流されていた。大海原にどことも知れず漂ううち、彼らは大きな船にとりかこまれてしまい、それからあのような眼にあつていた。おまけに、彼らは、舳を元の方へ戻させ、帆のあげ方まで嘴を入れた上で、戻したのである。彼らはこのことを村長、英五郎氏に話していなかつたはずだから、村長に引返す命令をされて、いきり立つた連中も、この時のことを思出して、ぞつとしてきた。

こうして遠征隊は敵にめぐり合わず（実はめぐり合おうともしないで）まだ故郷の島を視界から完全に見失わないうちに、一人も失わずに帰つてきた。戦果を待つていた村人たちは、船が意外に早く、万歳を唱えながら引き上げてくる姿を見て、海岸に群るように集り、崖の上からも鈴なりになつて手をふつた。妻子が、良人や父の名を呼んだ。それから恋人や親や……いろいろ、相手の姿を三艘の船の中にさがしては歓声をあげた。一艘の船ぐらいは、失うことをかくごしていたのに、船はぜんぶそのままであり、何もかも全部、失つてはいなかつたのである。奇妙な物足りなさが群集の中に少しずつ拡がつて行つた。

隣りの誰それが、それでなくとも、少し遠い親セキの某某が船の中にいないことをのぞんでい

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.